

南半球便り（その 77）：来ては去る大使達

5 月 24 日

ブロードウェー・ミュージカル「グランド・ホテル」の冒頭、俳優達が舞台上のリボルビング・ドアを次々と通り抜ける時に繰り返される台詞は、「ピープル、カム。ピープル、ゴー。」でした。キャンベラに駐在する各国の大使達も同じこと。来ては去って行く感じがします。

1. 朋友の送別会

先週、キャンベラの日本大使公邸では、5 年余りの任期を終えてジュネーブ、ミャンマーにそれぞれ異動するフィジー大使夫妻とノルウェー大使夫妻を迎え、心づくしの送別会を行いました。



日本大使公邸にて、フィジー大使夫妻とノルウェー大使夫妻の送別会を開催

キャンベラの公邸には、ふだん会食を行うダイニング・ルームに加えて、7 人ほど座れる天ぷらカウンターが奥にあります。日本ならではのおもてなしをする格好の舞台であり、このような設備があるのは何とも有り難いことです。着任時に埃をかぶっていた木目のカウンターを見て、「これを使わない手はない。」と小形公邸料理人と話していたのです。

そこで、夕食の最初の一品だけはダイニング・ルームで提供、その後は天ぷらカウンターに移動し、天ぷらと鰯を心ゆくまで味わってもらいました。勿論、日本酒も日本のウイスキーも、プロモートしました。

自分が楽しむためではありません。試行錯誤を重ねつつ、接待の「勝利の方程式」を探求しているのです。会食慣れしているゲストから、「忘れられない夜になった。」との感想を聞いた時、小形公邸料理人、ゆり子さん、マリアム、ダフネからなる公邸チームの周到な準備とおもてなしが報われたと感じました。



キャンベラの「リトル・トーキョー」天ぷらカウンターによるこそ



「勝利の方程式」を共に探求する公邸チーム

2. 二種類の大使

洞察力に富む豪州人の友人によれば、「キャンベラには二種類の大使しかいない。」とのこと。「よく仕事をする大使」と「殆ど仕事をしていない大使」だそうです（笑）。

ノルウェーのポール・ラーセンとフィジーのルケ・ダウニヴァルの二人は、明らかに前者でしょう。一年半前、着任後間もない私を彼らが誘ってくれたのが、「バイカーズ」という倶楽部。毎週土曜朝に湖沿いでサイクリングをする大使達の集まりなのです。



毎週土曜日は「バイカーズ」の仲間とバーリー・グリフィン湖沿いをサイクリング

週末の息抜きと運動だけでなく、自転車を伴走させつつ、そして、休憩時にフラット・ホワイト（エスプレッソとミルクを合わせた豪州の定番コーヒー）をすすりつつ、情報交換をするのです。先日は、私の誘いに乗って、アンドリュー・ウォレス下院議長も参加してくれました。ところが、大使連中のマウンテンバイクと違って、本格的なロードレーサー。早過ぎて、私のEバイクのリチウム電池の力を持ってしても、着いていけませんでした。やはり、豪州、恐るべし！（笑）

3. 友は身を助ける

外交官の仕事の三本柱は、人脈構築、情報収集、対外発信。もちろん、キャンベラに駐在して豪州と自国との関係を担当する大使となった以上、いずれの仕事に当たっても主たる対象は、任国たる豪州人になります。

同時に、第三国の外交官との関係が有益なパイプや情報をもたらすことも、少なくありません。特に価値や戦略的利益を共有する同志国とは、人脈の構築や情報の収集・分析に当たって相互に経験・知見を共有することによって、さらに質の高い仕事ができることとなります。そこで、主要国の大使館とは準定期的に擦り合わせをするのです。

同時に、同じ外交の世界にいる同業者であるので、切磋琢磨する面も多々あります。要人へのアクセス、対外発信の機会など、それぞれの大使が国益を踏まえて開拓していくべきものです。当然のことながら、そこには、熾烈な競争も待っています。

4. 打てば響く間柄

百花繚乱（第二グループは、百草繁茂でしょうか？）のキャンベラ外交団にあって最近鮮烈なデビューを果たしたのが、リトアニアのダルス・デグティス大使です。

インド太平洋を重視してキャンベラに大使館を開設するために赴任、開設式に合わせてランズベルギス外務大臣が豪州を訪問しナショナル・プレス・クラブで講演するなど、豪州におけるリトアニアへの注目度を飛躍的に高めたのです。

豪州、リトアニア共に、貿易大国による経済的威圧や脅迫に直面しているという共通項が背景にはあります。諸方面に働きかけるダルスのフットワークと手腕は、ニーダ夫人の笑顔と素晴らしい手料理と相まって、キャンベラの外交団に新たな彩りを加えています。

5. インド太平洋の意味合い

キャンベラには、欧州や南米の大使も多く赴任しています。その中には、日本との繋がりが深い外交官もいるのです。



ポーランド大使夫妻を魅了した雪の兼六園

例えば、EU のマイケル・パルチ大使。東京の EU 代表部の次席として勤務したことがあり、日本に温かい理解を持ったベテラン外交官です。先日もガブリエル夫人と共に映画「ドライブ・マイ・カー」を堪能してくれたようです。

ポーランドのミハウ・コロジエジュスキー大使とその夫人バーバラは金沢大学留学経験者。雪の兼六園の息をのむほどの美しさを語ってくれる人たちです。ポーランド大使館で行われた杉原千畝映画の日本大使館との共同上映会も、そもそもはミハウの発案でした。

同時に、日本にまだ行ったことがない大使も大勢います。そうした大使に、インド太平洋の戦略環境や日本・豪州が果たす役割に理解を深めてもらうのも、日本大使の重要な役目です。できれば休暇等を利用して日本に足を伸ばしてもらいたいと念じています。そのためにも、早期の国境開放が待たれるのです。

6. ようこそ、ヴァシル

「大使、来たる。」の最新メンバーは、ウクライナのヴァシル・ミロシュニチェンコ大使です。先日はゼレンスキー大統領が豪州連邦議会で演説し注目を集めたことは、南半球便り ([その 67](#)) で報告したとおりです。



ヴァシル・ミロシュニチェンコ新駐豪ウクライナ大使と公邸にて

加えて、豪州連邦議会の選挙戦の過程で、ナショナル・プレス・クラブで行われた防衛討論（ダットン国防大臣とオコナー影の国防大臣との討論）に招かれた大使（代表）は、日本、ウクライナ、リトアニア、台湾だけでした。「四人組」などと呼ばないでください（笑）。記者等で溢れかえった場で、ヴァシルがスタンディング・オベーションで迎えられた様は、実に感動的でした。

ウクライナを離れる前には防空壕で戦禍をしのいでいたヴァシル。6月には日本大使公邸で彼の着任歓迎夕食会を行います。豪州人要人、同志国大使と一緒に温かく輪の中に迎え入れ、連携を密にしていきたいと考えています。

7. 朋、遠方より来たる、また楽しからずや。

その後は、インドネシアから着任したばかりのシスウォ・プラモノ大使、そして米国のキャロライン・ケネディ大使の歓迎会を主催することとしています。

そうです、東京、ジャカルタ、ワシントンなどで先輩や同僚が培ってきた人脈がキャンベラで新しい花を咲かせることになるのです。このあたりが外交の醍醐味でしょう。

山上信吾